

聖書: ヨシュア記 9:1-27

説教題: 主の指示を仰いで

日 時: 2010年6月13日

イスラエルは約束の地に入って最初の町エリコに勝利し、次いでアイの町を攻め取りました。これを聞いて、先住民たちが同盟を結んだことが今日の章の1節に記されています。この同盟関係を結んだのはヘテ人、エモリ人、カナン人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人の王たちです。彼らはイスラエルがこの地に入って来たことを聞いて心がしなえた、と5章1節に記されていましたが、そのイスラエルが小さな町アイに一旦は負けたことを知って、勇気を奮い起こしたのかもしれませんが。このままむざむざとやられるよりは、互いに協力して何とかイスラエルに対抗しようとしたのでしょう。そういう中でギブオンの住民はこの同盟に加わらず、イスラエルのところにやって来ました。このギブオンという町は、次の10章2節に記されている通り、大きな町であり、カナン人たちの同盟には当然加わることが期待されていたでしょう。しかし彼らはイスラエルがこの地の住民との戦いに勝利することを確信していました。24節で述べますように、主がこの地をイスラエルに与えていることを疑いませんでした。それでカナン人の同盟には加わらず、ひそかにイスラエルのところにやって来たのです。

しかし彼らには難しい問題がありました。それは自分たちが誰であることを明らかにしてイスラエルに近づいたら、受け入れてもらえないということです。申命記20章10～18節を見ると分かりますが、イスラエルは町を攻略する際、まず相手の町に降伏を勧めます。相手がそれに同意したら、その民を生かし、しもべとして働かせる。一方、降伏しなかったら、その時に初めて戦いへと移って行きます。しかし次に示す町々については問答無用で聖絶しなければならない、と言われていました。申命記20章17節に記されていますが、それがすなわち今日の章の1節に出て来るヘテ人、エモリ人、カナン人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人です。彼らは罪に罪を重ねて必ずさばかれなければならない人々です。ギブオンの町はこの中のヒビ人に属することが7節に記されています。従って彼らは自分たちの身を明かすことはできません。そこで彼らは変装し、ボロボロの格好とボロボロの食料を持って、いかにも遠くからやって来た住民であるような振りをして、イスラエルに近づいて来たのです。

ヨシュアとイスラエルは最初は疑いました。7節で彼らは言いました。「イスラエルの人々は、そのヒビ人たちに言った。『たぶんあなたがたは私たちの中に住んでいるのだろう。どうして私たちがあなたがたと盟約を結ぶことができようか。』」しかし彼らの話を聞き、その持ち物や格好を見てみると、彼らが言っていることは本当のように思えて来ます。まずこの人々は9～10節で、かつての出エジプトの事件、またヨルダン川東側の二人の王シホンとオグの事件について述べています。ここでうまいことは、彼らは最近のエリコとアイのニュースには触れていないことです。遠くからやって来た民は、昔のことは知っていても、最新のニュースは知らない方が自然です。そこでギブオンの人々はそのことについては触れなかった。また非常に低い姿勢で盟約を結んでくれるように訴えています。8節、9節、11節で、私たちは「しもべです」と繰り返し語っています。そして何と言っても見える持ち物や格好がボロボロです。パンも乾いてボロボロ。ぶどう酒を満たした皮袋も、つぎはぎした上に破れている。着物やはきものも古びていて、長くて厳しい旅路を指し示しているようです。そこで彼らの食料をいくらか取って食べてみると、本当にそのパンはボロボロで涙が出て来そうになる。かわいそうになり、こんな善良な遠い地の住民を疑うべきではない、という思いが彼らの心を支配した。そこで

ヨシュアと族長たちは彼らと和を講じ、彼らを生かしてやる！と約束したのです。ところが三日後になって、実は彼らは近くに住んでいる者たちであることが判明します。イスラエルは自分たちが騙された！と分かった。彼らは激しいショックを覚えたでしょう。しかし悪いのは誰なのか。もちろん嘘をついたギブオンの住民も悪いかもしれませんが、しかしこのヨシュア記 9 章は、イスラエルに責められるべき問題点があったということを強調しています。すなわち 14 節にある通り、「主の指示をあおがなかった」ということ。彼らは主に尋ねず、ただ自分たちの感覚で判断してしまった。一番大切な主の御心を伺うというプロセスをパスしてしまったため、彼らは大きな失敗をし、悩みの中に落ちてしまったのです。

私たちもここから自分の知恵と悟りに頼ることの愚かさを改めて学びます。私たちはやはり御言葉に常に立ち返らなければなりません。自分が今、直面している問題や課題に御言葉は何と言っているのか。自分の思いを一旦脇に置いて尋ね求める。そして祈りを通してそれが本当に主の御心になったことかどうか、示して頂く。そのことをしないで人間的に判断すると、このように私たちも欺かれるのです。

イスラエルはこの結果、混乱に陥りました。イスラエルの全会衆は族長たちに向かって不平を鳴らした、と 18 節にあります。彼らとしては、族長たちが盟約を結んだことにも不満があったでしょうけれども、その後の対応にも不満があった。彼らは、自分たちを欺いたギブオンに対しては、結んだ盟約を守る必要なし！と訴えたに違いありません。あちらがこちらを騙したのだから、もはや先の約束は無効であり、彼らを滅ぼすべきだ！と主張したに違いありません。しかし族長たちは 19 節でこう言います。「私たちはイスラエルの神、主にかけて彼らに誓った。だから今、私たちは彼らに触れることはできない。」先に交わされた誓いには、ギブオンの人々の誠実さに関する条件はありませんでした。イスラエルはただ彼らと盟約を結び、彼らを生かすと約束しました。その約束を破ったら、それは主の御名を汚すことになる。この地域全体に、主の民は嘘つきで、その神・主も平気で偽りを述べる神であるという評判をもたらすことになる。それは決してしてはならないことです。ヨシュアは 22 節でギブオンの住民を呼び寄せて、なぜこのようなことをしたのか、と問います。それに対して彼らは、自分たちの正体を明かせば生き延びる道はなかったもので、このようにしたのだと述べました。そして 25 節で「ご覧ください。私たちは今、あなたの手の中にあります。あなたのお気に召すように、お目にかなうように私たちをお扱ってください。」と申し出ます。そこでヨシュアは彼らをイスラエルのため、また主の祭壇のために、たきぎを割る者、水を汲む者として生かしました。26 節に暗示されていますように、イスラエルの民は、こんな彼らは殺すべきだ！と主張し続けたようです。私たちがだったら、どっちの立場に立つでしょうか。民が主張したように、ギブオンの住民が嘘をついたのだから、こちららも約束を守る必要はないと主張して、約束を破棄する方が楽な選択です。相手が悪いのだ、と相手だけを責め、相手を滅ぼしてしまえば、その後は何事もなかったようにきれいさっぱり状態で歩むことができるでしょう。一方、一度誓った誓いは果たさなければならないと考えて、その約束を忠実に守る生活をするにはある意味でしんどい。主が生かしておいてはならないと命じられた先住民を、自分たちの失敗ゆえに生かしておくのは不本意です。彼らを見るたびに自分たちのミスを思わなくてはなりません。こんな状態になってしまって、主の祝福は頂けるのだろうか、と思わざるを得ない毎日となってしまいます。しかしヨシュアと族長たちは誓いを守る道を選びました。主の指示を仰がなかったという先の失敗にもう一つの罪を重ねることをしなかったのです。彼らは自分たちの失敗を反

省し、またそれがもたらした災いを身に引き受けつつ、その中で何とか主に忠実に歩む道を！と選んで行ったのです。

私たちはこのような章を見てどう思うでしょうか。すっきりしない気持ちだけが残るでしょうか。しかし主はここから良いものを取り出して下さったことを、私たちはこの後を見て行く中で知ります。まずこのギブオンの町は、10章2節に記されている通り、大きな町であり、王国の都の一つのような町でした。その重要な町をイスラエルは無血で手に入れることになりました。またこの結果、次の10章で見る内容ですが、周りの町々、すなわちエルサレム、ヘブロン、ヤルムテ、ラキシユ、エグロンの王がギブオンを一致して攻めようとしています。イスラエルはそれを助ける形で、このカナンの中の町々の連合軍と次々に戦うように強いられて行きます。そのことによってこのカナンの土地の征服が促進され、カナン南部の諸都市を一気に勝ち取ることへとつながります。不思議な主の導きです。しかし果たして本来は聖絶すべき人々をイスラエルの中で生かしておいて大丈夫なのでしょうか。この後見て行くと、ギブオンの人々は忠実に歩いて行ったことが分かります。彼らはイスラエルと同盟関係を結ぶことは、周りのカナン人たちを敵に回すことであることを十分知っていたでしょう。その危険を承知の上で、彼らはイスラエルの民と一つになることを願った。イスラエルを欺いたそのやり方は決してほめられたものではありませんが、主に付こうとするその必死な姿は前に見たラハブの姿と重なるのではないのでしょうか。彼らは主に避けどころを求めて近づく異邦人の姿を象徴しており、ここにも神はご自身を求める者は、聖絶に値するような者であっても救って下さるというメッセージが示されているのではないのでしょうか。そしてこのギブオンは、ネヘミヤの時代にはイスラエルの一部となるまでに組み込まれて行くことを私たちは見るのです。

以上のヨシュア記9章は私たちにどんなメッセージを語っているでしょう。それは一度ミスをした中でも忠実な歩みをする者に注がれる主のあわれみについてではないのでしょうか。イスラエルは主の指示を仰がずに大きな失敗をしました。それによって取り返しのつかない災いと混乱を身に招いたようでした。しかしだからと言って手遅れなのではない。そういう中で悔い改めて主に忠実な歩みをするなら、なお望みがあるのです。なぜなら主はそのひどい状態からも良いものを取り出し、今現在の災いを祝福に変えることのできる方であられるからです。

私たちは日々、主の指示を仰いで歩むべきです。そこに主の祝福があります。しかし私たちも失敗します。そして自分が犯した罪の刈り取りを強いられているのだなあ～と思わされるような生活があります。苦しい毎日の中に置かれることがあります。しかしだからと言って希望を失ってはならない。イスラエルが混乱の中でも、主の御名に栄光を帰すために誓いを守って歩んだように、私たちも低められつつも、その中で主に忠実に歩いて行くなら、主はなおも憐んで下さる。その主によって今の私の暗闇は光にやがて変えられる。今の悲しみは喜びに変えて頂くことができる。私たちはそのような主がおられることを見上げて、御前に誠実に歩みたいのです。目の前の混乱からも良いものを取り出すことのできるお方がおられます。その方を仰いで、私たちは今置かれているところから、主の指示を仰ぎ、主の御心に従う生活へ進んでまいりたい。そのような私たちに主は憐れの御手を伸ばして下さり、奇しい御手をもって、やがて私たちの思いをはるかに超えた祝福へ導いて下さるのです。